

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## ボリビアの農民： 農民の「行動の記録」の分析（その1）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2010-02-16 キーワード: 作成者: 藤井, 龍彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004283">https://doi.org/10.15021/00004283</a>

ボ リ ビ ア の 農 民  
—農民の「行動の記録」の分析（その1）—

藤 井 龍 彦\*

Life of the Bolivian Peasant: An Analysis of Diary Entries

Tatsuhiko FUJII

This article is an analysis of a corpus of data entitled “Diaries of Bolivian Peasants.” These diaries were written by ten Bolivian peasants (Aymara speakers) of the highlands of the Department of La Paz. They were requested to write these diaries by Mauricio Mamani when he was one of the Bolivian coordinators in the Rural Development Service Program of Cornell University.

The diaries were written between April 8, 1979 and June 30, 1981. They consist of such daily activities as agriculture, animal husbandry, economic transactions, making of textiles, communal/family feasts or rites, and recreation.

I analysed the first one-year cycle (from April 8, 1979 to April 7, 1980) of one peasant family (husband, wife, a daughter, and a son) who live in Yuka community, Camacho Province (Map 1). The objective was the quantitative analysis of peasant life based on the diary's contents.

The results of the analysis are as follows:

- 1) Agriculture: on which this family spends only 30% of their total working hours on agricultural activities.
- 2) Sexual division: the sexual division of labor in this family is not marked, either in agricultural or other activities, such as cooperative and domestic work.
- 3) Reciprocity: 31 times during the year, the family offered help, in the form of labor, to other families, including that of the husband's father. Whether this figure is high or low is yet in question because of the lack of quantitative data for comparison.

---

\* 国立民族学博物館第4研究部

But we may say that the social relationship from which they can expect help when they need it is relatively narrow and limited.

4) Altruistic labor: accounted for about 7% of this family's total working hours. For Bolivian peasants, altruistic labor means that they pool their working hours for future necessities.

Needless to say, this analysis was based on only the diary of a single peasant family living in one region of the Bolivian highlands, so we cannot generalize the results as being applicable to other Andean rural communities.

- |                     |               |
|---------------------|---------------|
| 1. はじめに             | 4-2. 仕事の分担    |
| 2. 資料と方法            | 4-2-1. 農作業    |
| 3. 農民Aの1年間の生活       | 4-2-2. 牧畜     |
| 3-1. ユカ村            | 4-2-3. 副業     |
| 3-2. 農民Aの最初の1週間     | 4-2-4. 買物     |
| 3-3. 農民Aの1年間の生活     | 4-2-5. 夫婦の分業  |
| 4. 農民Aの生活の分析        | 4-3. その他      |
| 4-1. 農牧生活           | 4-3-1. 収支     |
| 4-1-1. 農耕サイクル       | 4-3-2. 農業協同組合 |
| 4-1-2. 農作業の労働時間と収穫量 | 4-3-3. 社交・娯楽  |
| 4-1-3. 手伝い          | 5. おわりに       |
| 4-1-4. 牧畜           |               |

## 1. はじめに

筆者は1983, 85の両年, ボリビア領北西部高地において定期市の調査を行い, その結果はすでに本研究報告において発表した [藤井 1987]。調査結果を簡単に述べると, 中央アンデス全域においても, ボリビア領は定期市の良く発達している地域であり, なかなく調査地であったラパス県高地部は, 市の開かれる町や村の数, 市に集まる人の数ともに, その他の地域に比べ多いことが判明した。

この地域で定期市が発展する理由のひとつとしては, 首都ラパスの存在があげられる。つまり, 市は人口集中地に対する農牧産物の供給システムの一環として機能している。しかしながら, ラパスから遠い, あるいは交通の不便な遠隔地においても, 規模は小さいとはいえ, 数多くの定期市が開かれているということは, 上記の理由だけでは説明できない。

農村から都市への農牧産物供給、あるいは逆に工業製品などの農村への供給は、定期市の持っている経済的機能として重要なものである。しかし、市が持つ機能は、このような経済的なものだけではない。つまり、経済的機能がほとんど働いていない地域における市の発展は、市という不特定多数の人間が集まる場という特性によると考えなければならない。ポリビア領に限らず、中央アンデス高地部における農牧社会は、生業においても、村の内外での人間関係においても、互酬、再分配、パトロン・クライアント関係など、多くの共同体としての規制にしばられているのが実情である。このような日常生活の中で、これらの規制に対して「市」（商取引）の持つ解放性こそが、多くの農牧民を市へと導く要因となっている [藤井 1987 : 107-109]。

ところで、筆者がこれまで行ってきた市の調査は、毎週各地で定期的にかかれる市における参与観察によるものであった。その際得られた資料のうち、時間、人数、商品の種類や量などは、ほぼ正確なデータを集めることができた。しかし、そこに集まる農牧民に関するデータ（市にくる頻度、持ってくる農牧産物や交換、あるいは買うことによって入手する品物など）は、限られた時間内での聞き取りだけであったため、多くを集めることは不可能であった。幸いこれらのデータは、本稿でとりあつかう農民により書かれた「行動の記録」（以下単に「記録」とのみ記す）を使うことにより補強することができた。「記録」から得られたデータは、現地調査で得られたいくつかの資料と共に、市に対する農牧民の関与の割合をはっきりと示しており、資料的価値の高いものであるということが確認された。

本報告はこれらの「記録」に基づいて、前回あつかった、市およびそれ以外の場における物資の購入あるいは交換・売買の側面ばかりではなく、生業（特に1年間のサイクルや夫婦間の分業）、社交、その他の面における、ポリビア高地の農民の生活を数量的データを加味して分析しようとするものである。

## 2. 資料と方法

本報告で使用した資料は、ポリビア高地の農民自身によって書かれた「行動の記録」である。この「記録」に関しては前稿でも触れたが、もう1度これらが書かれた由来について明らかにしておく。

1979年から81年にかけて、コーネル大学国際研究センターは、アメリカ合衆国国際開発事業団 (USAID) とポリビア農牧省 (MACA) の後援で、農村開発サービス計画 (RDS) をポリビア農村において実施した。「記録」は、同計画のポリビア側責任

者のひとりであったマウリシオ・ママニ (Mauricio Mamani) 氏の発案により、ラパス県高地部における農牧生活のさまざまな側面に関する基本資料収集のために、1979年4月から1981年6月までの2年と2ヶ月にわたり、農民自身による日々の行動記録として書かれたものである。この計画に参画した農民は、すべて現地語(アイマラ語)使用者であるが、「記録」はスペイン語で書かれている。「記録」の書き方は個人により差があるが、内容の基本は農作業、家畜の世話、水や燃料の供給、食事の準備、衣服の洗濯と繕い、織物、売買あるいは交換などの取引、保健、家族あるいは村の祝いごとや祭り、その他多くの日常生活に関するものである[HATCH 1982: viii]。「記録」の記入に関しては、計画期間中定期的に、ママニ氏が書き方についての指導を行っていた。しかし、あくまでもこの計画に協力した農民たちの、自発的な意志により書かれたもので、かつ資料としての公開を前提としている。

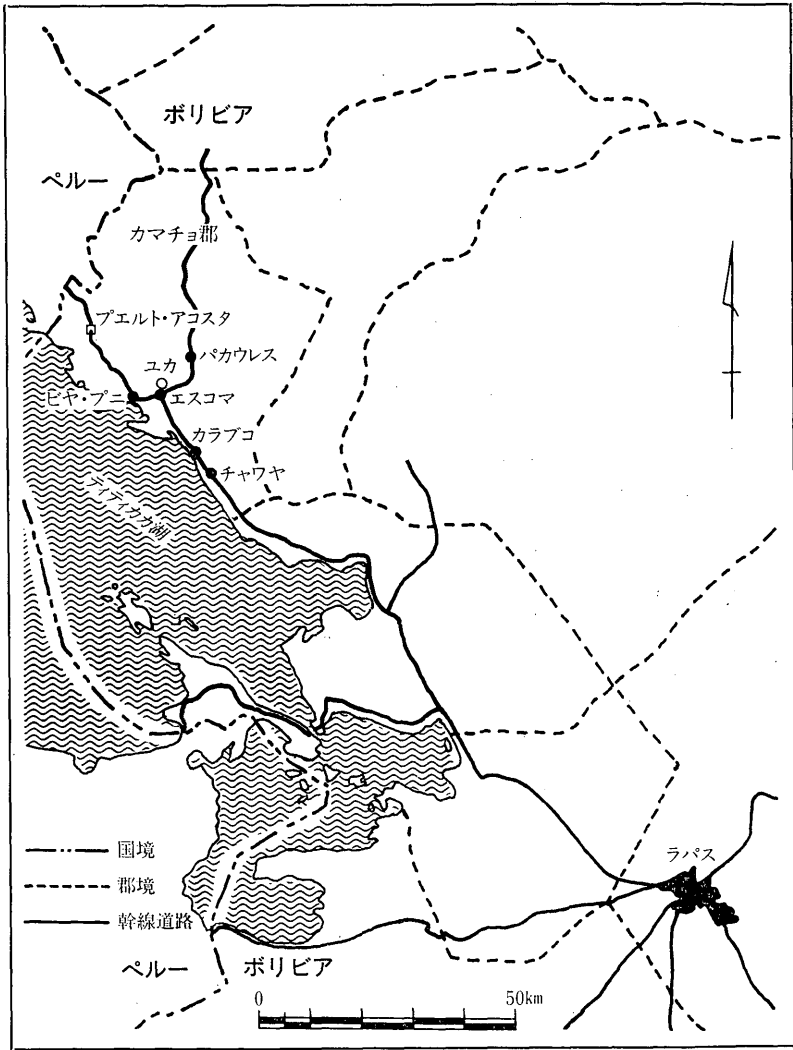
この計画自体は、ボリビアの高地のみならず、中部のコチャバンバ地方、および東の低地のサンタ・クルス県をも含み、参画した農民の数は130家族以上にものぼる大掛りなものであった。前述の計画は『Nuestros Conocimientos (私たちの知識)』[HATCH 1982]という題の報告書を出版することで終了した。「記録」自体はこの報告書の資料として使われることはなかったが、終了後、高地の10人の農民により記入されたものは、ママニ氏によりタイプスクリプトされ保管されていた。ママニ氏は1983、85両年におけるわれわれの調査の現地研究分担者であったので、この貴重な資料をわれわれに提供してくれたのである。

今回の報告では、「記録」の分析によるアンデス高地農民の生活調査の第1部として、この10人の中からまずティティカカ湖岸ユカ(Yuka)地区の1人(仮にAとする)を選び、かれ自身の記述(記録)を通した1年間の生活を細かく検討することにより、ボリビア国ラパス県高地部の農民の生活を記述し、分析するという方法をとっている。その結果、このような「記録」資料が、どの程度まで農民の生活の分析に有効であるかということ、再度確認することができれば、将来の調査に大いに役立つであろう。

### 3. 農民Aの1年間の生活

#### 3-1. ユカ村

まず、ユカ村の概略を述べるが、筆者自身は近くのエスコマ(Escoma)村での調査は行ったが、ユカ村へは行ってないので、前述の『私たちの知識』からその概要を紹介する。



地図1 ラパス県北西部

ユカはボリビア国ラパス県カムacho (Camacho) 郡エスコマ地区に属し、地区の中心であるエスコマ村からの距離はわずか 5 km にすぎない。村は三方を丘に囲まれており、北側は旧アシエンダであるカラカラ (Cala Cala) と、南側はティワナク (Tihuanacu) 村と、そして東側は旧アシエンダのトゥトゥクチョ (Tutucucho) と、西側はヨカリャタ (Yocallata) 村と接している (地図1)。

村には64家族が居住しており、その中には耕地を持たない家族もある。村の耕地の半分は居住地に近い平地、あるいはなだらかな丘の斜面にあり、面積は約75ヘクタールである。そ

の大部分はきわめて肥沃であるため、集約的な農耕が可能である。残りの半分はアパチュタ (apacheta) あるいはアネクソ (anexo) とよばれており、村の中心から数キロメートル離れた草地で、主として家畜の放牧に使われている。

村には先生3人、生徒120人からなる小学校と、組合員60人が加盟している農業協同組合がある。毎年組合が所有する土地で、ジャガイモを共同耕作し、1年中収穫物を貯蔵する倉庫も備えられている。村人の約半数はカトリックの信者で、残りはアドベンティスタ（キリスト再臨派）で、かれらは村内に自分たちの教会を持つ。

ユカ村は海拔3,655mの高さにあり、年間を通して灌漑に利用できる大きな川が無いにもかかわらず土地は湿っており、また気候も三方を丘に囲まれているため比較のおだやかである。そのため、ジャガイモ、ソラマメ、エンドウマメ、オカヤオユコ（イモの一種）、オオムギ、カラスムギ、キヌア、タルウィ（マメの一種）など多種類の作物が耕作されている。耕作はこれらの作物の組合せによる輪作で、休閑は4～5年に1度行われるにすぎない。各家族は1.5ヘクタールの耕地を、村内の10以上の地域に分散して所有している。

牧畜に関しては、ユカ村はブタの飼育で有名であり、また近年は乳牛の飼育も盛んになっている。1家族平均15～25頭のヒツジ、運搬用のロバ、ニワトリを飼っている。この村ではペルーとの国境に近いという利点を生かして、ペルー側農民との交換を行うばかりでなく、ペルー製工業製品や加工食品の取引（大部分は密輸）にかかわる人が多い。

毎週木曜日と日曜日に近くのエスコマ村で、また水曜日にはやや離れたパカウレス (Pacaurés) でも市が開かれる。ユカはまた、この地域における祭りの衣装の製作地としても知られており、貸し衣装の活動はボリビア国内のみならず、隣のペルー国にまで広がっている [НАТЧН 1982: 6]。

### 3-2. 農民Aの最初の1週間

本稿ではまず、ユカ地区の農民Aの行動の記録を丹念に分析することから始めるが、その前にこの「記録」の記載内容がどのようなスタイルを持って書かれているかを示すために、その最初の1週間の掲げておこう。

1979年4月9日

私は農民である。主な農具は次の通り。ウシのユンタ。刃のついたすき。鉄の棒。スコップ。つるはし。その他。私は、食事室が1つ、複数の寝室、クイ（テンジクネズミ）を飼っている台所からなる家を持っている。家畜としては、ウシ、ヒツジ、ブタ、ロバなどを飼っている。

私はユカ村のマルコナという所に住んでおり、フチョホレ第2区に属している。我家は4人家族。私、妻、10才の娘、7才の息子である。

妻と私は毎朝早起きし、歯を磨き、洗面をする。子供たちも同様である。妻はまず朝食の支度をし、家族全員でオオムギのピト（煎ったオオムギを臼で挽いた粉を、湯で溶いたもの）の朝食をとる。娘もジャガイモの皮をむいたり皿を洗うなど、妻の台所仕事の手伝いをする。息子は学校に行っている。

娘は毎朝20頭のヒツジと2頭のブタを、草を食べさせに連れて行く。私と妻も1日中仕事をする。まずウシに餌をやる。（ウシの飼料として）1日に草、アルフェルファを混ぜたオ

オムギを与える。

妻はまたココの売り手でもある。今日は妻と共にジャガイモを2カルガ（1カルガ約57.5キログラム）収穫し、タネイモの選別を行う。

（今日は）娘が病気なので私はユカへ薬を買いに行かなければならない。

4月10日

今朝はとて早く起きた。妻はまず台所の掃除をし、料理にかかる。私は（支給された）ノートに今日やる仕事の記入を始める。息子は本を開いて勉強をし、宿題をする。

食事のあと、娘はヒツジとブタを連れて草を食べさせに草地に行く。彼女は昼食を持って出掛ける。

息子は毎日午前中道具を持って学校に行く。私は彼のノート用として、紙を100枚、ノートを1冊、色鉛筆1ダース、定規、ケシゴム、糊、そして赤と青のズボンを、また身だしなみ用としてタオル、セッケン、櫛、歯ブラシを買う。これらすべてで136ペソかかる。

妻はその後、午前と午後ウシに餌を与える。（ウシは）1日にオオムギ1カルガ——30ペソ相当——を消費する。

その後昨日と同じ畑でジャガイモの収穫を始める。12時に弁当を食べるために休憩。終わって午後5時まで仕事を続ける。今日は2カルガのジャガイモを収穫した。1カルガは5アロバ（1アロバは25ポンド＝約11.5キログラム）ある。すべてのジャガイモをひとつの場所に集積する。午後ヒツジとブタと共に帰ってくる。（仕事を終わって）午後帰宅し、妻は夕食の支度にかかる。娘が（支度を）手伝う。

4月11日

今日水曜日、仕事に行くため早起きをする。まず妻は台所の掃除をし、ゴミを捨てる。それが終わってから昼食の支度にかかるが、その前に朝食を準備する。私はその間に缶を持って水汲みに行く。私はいつも妻の手伝いをする。娘はスープと弁当のためのジャガイモの皮むきをして母親の手伝いをする。息子は朝食をすませてから、勉強にかかり、学校の宿題をする。

妻は料理が終わってから、朝6時半に車でパカウレスの市に出かける。運賃として6ペソ払う。市にはココの小売りに行く。ひとつかみだと2ペソ、量り売りだと1ポンドを20ペソ（で売る）。しかし今日は50ペソしか売れず、売上げは少ない。帰宅する際、彼女はトウモロコシ、カボチャ、果物など計23ペソ買ってくる。帰りの運賃も3ペソ払い、帰宅する。

4月12日

妻は朝食の支度のために早起きする。（支度が終わって）すぐに皆と一緒に食事をする。終わって私はカラブコとチャワヤに車で行く。エスコマからの私の運賃は30ペソ。チャワヤで降りて仕立て屋のハビエルの所に行く。先週背広を仕立てるためにフォルノ印の洋服地を置いてきた。この生地はメートル650ペソ、全部で1,056ペソしたものである。仕立て屋は仕立て代として650ペソ取る。背広を受け取り、午後5時帰宅。

妻はウシに草をふたかかえ与え、息子は学校へ、娘は家畜に草を食べさせに出る。妻はまたエスコマの市へココを売りに行く。今日は110ペソの売上げ。帰りに果物とサカナを15ペソで買って帰る。

4月13日

今日金曜日は、朝8時からジャガイモの収穫にとりかかり、12時まで仕事をする。終わって1ヶ所に集め、毛布で覆っておく。

その後エスコマへ、カピタン(祭りの役のひとつ)たちのウマの競走を見に行く。今日はキリストが昇天した聖金曜日なので、1日中エスコマで過ごす。妻は(市の)コカ売場の責任者である。家には夜になって帰る。

4月14日

今日は(前と)同じジャガイモ畑で仕事をし、午後2時までには収穫を終わる。終わって虫食いのジャガイモをより分ける。この畑から今年は9カルガの収穫があった。終わって雨に濡れないようジャガイモを十分に覆う。

4月15日

今日は日曜日。朝早く起床。妻はイースターのためニワトリのスープを作る。食べ終わってふたりの子供は草を食べさせに、ヒツジとブタを草地に連れて行き、午後すべての家畜と共に家へ帰る。

その間、妻と私はエスコマへ行くために洗髪をする。終わって干したカラスムギを与えるために、ウンを外へ出す。妻はエスコマの市でコカの売りをする。私はウマを見に行く。ウマたちはとても見事な脚を持っている。夜遅く帰宅。

### 3-3. 農民Aの1年間の生活

「記録」の記述は以上のようなものである。ここから、Aは妻と10才の娘、7才の息子との4人家族で、ウシ、ロバ、ヒツジ、ブタを飼っていること、妻が近くの村で開かれる定期市でコカを商っていること、娘は毎日ヒツジとブタの放牧に、息子は学校に行っていることなどがわかる。「記録」の記入のスタイルは人により異なっているが、基本的には農民の朝起きてから、寝るまでのできごとを時間を追って淡々と書き記しており、それ以外のこと、例えば個人の感想などは非常に少ない。しかし、誰が何時どこで何をしたか、どのような買物をし、いくら払ったかなどが、忠実に記録されている。そのため、「記録」は期せずして、労働の種類・日数・時間、家庭内での仕事の分担、売買や家計、旅行の行き先や目的などに関しての、具体的かつ数量的なデータがわかる資料となっている。なお表中の(?)は、当日あるいは当人の特別な行動記録が無い日を示す。

以下第2週以降は、月曜日から日曜日までの夫婦の主な行動を1~2週間ごとに表にし、適宜コメントをつけてゆく。なお農作業は収穫・播種などの作業内容で示し、作物名は旅行、買物などの行き先と共に( )内にあげておく。

ただし、前述のように、娘は毎日ヒツジとブタの世話をしており、息子は休暇の期間を除いて、土曜、日曜・祭日以外は学校に行っている。子供たちが農作業を手伝っ

た場合は、表に+子供・娘・息子として示してある。また、ヒツジとブタ以外の家畜（ウシ、ロバ）とニワトリには、夫婦どちらかが仕事の合間に適宜給餌をしたり、川へ水を飲ませに連れて行く。

第2週

	夫	妻
4.16	旅行(ラパス)	?
4.17	買物(ラパス)	?
4.18	旅行(帰宅)	?
4.19	手伝(父親)	?
4.20	組合の共同労働	?
4.21	衣装製作	?
4.22	衣装製作	定期市(エスコマ) 洗濯 収穫(ジャガイモ)

さて、第1週は夫婦単位での行動が多かったがこの週は、それぞれ単独の行動になる。このようなケースは、第3週以降の表を参照すればわかるように、どちらかといえば異例である。

最初の2日、夫が首都ラパスへ旅行している間の妻の行動は全然記録されていない。ラパスでの買物は灯油のほか、モレナダ(伝統的な踊り)の衣装

製作に必要なボール紙、マトラカという楽器(一種のガラガラ)のほか、コカを1籠である。灯油とコカのほかには次に始まる衣装製作の準備で、Aは祭りの衣装(特に刺繍)の職人である。前述のように、この家族は妻が市でコカを売るほかに、夫も副業として衣装製作を行っている。また22日の日曜日に妻がひとりで農作業を行っているのは、夫が頼まれた衣装製作で忙しく時間がなかったためであろう。

第3・4週

	夫婦	夫	妻
4.23	手伝(父親)		
4.24	収穫(ジャガイモ)		
4.25	?	?	?
4.26	収穫(オオムギ)+娘	衣装製作	定期市(エスコマ)
4.27	収穫(オオムギ)	ブタ小屋作り 衣装製作	
4.28		衣装製作	収穫(オオムギ)+娘
4.29	祭り見物(エスコマ)	衣装製作	定期市(エスコマ)
4.30	祭り見物(エスコマ)		
5.1	祭り見物(エスコマ)		
5.2		二日酔	?
5.3	祭り見物(カラカラ)	衣装持参(カラカラ)	市(カラカラ)
5.4		?	家畜の世話
5.5		衣装回収(カラカラ)	収穫(オカ)
5.6		魚釣り	定期市(エスコマ)

ここで注目されるのは、父親とはいえ、仕事の手伝いをした場合には報酬を受け取っていることである（この場合はジャガイモを2アロバ）。2週目の後半にはイースターがはさまり、夫婦でエスコマに祭りの見物にでかける。5月3日には、夫はカラカラのサンタ・クルスの祭りに頼まれた衣装を届けに行き、そこでココを売るが、ついでに祭りの見物もしている。衣装は貸し衣装で、5日にはそれを受け取りに再びカラカラへ行かねばならない。魚釣りは、近くの川でベヘレイ、カラチという川魚を釣る。この週はめずらしく娘が手伝いをしているが、その際は家畜も連れて行き、畑のそばで草を食べさせる。

第5週

夫婦	夫	妻
5. 7 収穫(オオムギ)		
5. 8 収穫(オオムギ)	魚釣り	
5. 9 耕起(ジャガイモ)+手伝1人		
5.10 耕起(ジャガイモ)		定期市(エスコマ)
5.11 収穫(オカ)		
5.12 収穫(オカ)	運搬(オカ)	教会
5.13	魚釣り	定期市(エスコマ)

この週から農作業が本格的に始まる。この週は、オオムギ、オカの収穫とジャガイモ畑の耕起が中心。耕起は2頭のウシに引かせる犁耕で、アンデスで一般にユンタとよばれるものである。人手が足りない時は近所の人（この場合は女性）を頼むこともある。12日には妻が教会へ行っている。この家族はアドベンティスタであるが、教会へ行くのはまれである。

第6・7週

夫婦	夫	妻
5.14 耕起(?)	収穫(オカ)	
5.15 運搬(?)	耕起(?)	
5.16 収穫(オカ)	運搬(オオムギ)	手伝(父親)
	耕起(?)	
5.17	?	定期市(エスコマ)
5.18	手伝(弟)	?
5.19	耕起(?)	選別(オカ)
5.20 定期市(エスコマ)		
結婚式列席(エスコマ)		
5.21 披露宴列席(エスコマ)		
5.22 披露宴列席(エスコマ)		

5.23	披露宴列席(エスコマ)	
5.24		組合の会合
5.25		衣装製作
5.26		手伝(父親)
5.27	定期市(エスコマ)	選挙登録

前半は引続き農作業が盛んに行われる。耕起（おそらくジャガイモ畑の）、オカの収穫、選別中心。17日の定期市では、ビールを1ファルド（本数不明）と清涼飲料水半ファルドを購入しているが、これらは「家で小売りするため」のもの。

18日の手伝いは、Aの弟の息子が翌々日に結婚式をあげるので、8頭のヒツジの解体をするため。この場合の報酬は、仕事を終わってヒツジの心臓入りスープをふるまわれること。結婚式と披露宴は、「習慣により」4日間にわたり、その間におびたらしいビール、アルコールが消費される。Aも贈物としてビールとアルコールを138ペソ買う。

始めに記したように、この村には農業協同組合が組織されており、Aも組合員の一人である。妻は、定期市ばかりでなく、祭りなどの機会にも人出をあてこんでコカ売りにでかける。

第8週

	夫婦	夫	妻
5.28	学校(母の日)		
5.29		手伝(父親)	?
		友人訪問(祝い)	?
5.30		手伝(父親)	?
5.31		買物(チャワヤ)	定期市(エスコマ)
6.1		家畜囲い作り	?
6.2		運搬(オオムギ)	?
6.3	定期市(エスコマ)		

アンデスでも母の日は5月13日の第2日曜日であるが、ユカではこの年は28日に記念の踊りの大会が学校で開かれる。そこで息子が悪魔踊りを踊る。母親たちは子供たちから贈物を受け取る。

29日は友達の息子が兵役を済ませたお祝いの席。徴兵制が敷かれているポリビアでは、兵役を済ませた祝いは通過儀礼の一種として、農村地帯では広く普及している。祝いの席に贈物としてビールとお金を持って行く。この習慣は村内における互酬のひとつの現れで、つきあいとして半ば義務的になっている。

第9週

	夫婦	夫	妻
6. 4	?		
6. 5	収穫(オカ)	組合の会合	
6. 6		組合の会合	?
6. 7		家畜番	定期市(エスコマ)
6. 8	収穫(オオムギ)		
6. 9		衣装製作 組合の共同労働	?
6.10	祭り見物(ヨカリャタ)	衣装貸し(ヨカリャタ)	定期市(エスコマ)

6月4日は、夫婦の行動については何も書かれておらず、子供たちのことのみ。この週になって組合の活動が増えるが、Aは幹事のため、会合ごとに欠席を取らなければならない。8日からオオムギの刈り入れが始まる。9日の仕事は後述の組合の建物を建てるためのアドベ(日干しレンガ)製造の準備として、用水池から水を引く作業。

第10週

	夫婦	夫	妻
6.11		衣装貸し(ヨカリャタ)	?
6.12		収穫(オオムギ) 組合の共同労働	?
6.13		組合の共同労働	定期市(パカウレス)
6.14		糸紡ぎ	定期市(エスコマ)
6.15	選別(オカ)		
6.16	収穫(オオムギ) 運搬(オオムギ)		
6.17	定期市(エスコマ)	友人訪問(祝い)	

第1週を除き、この数週間妻がコカを売りに行ったのはエスコマのみであったが、この週から再びパカウレスにも行き始める。パカウレスはユカの北東約7kmにある村である。この村へは通常一度エスコマへ徒歩で出て、そこから車をひろって行く。この週から組合の建物のためのアドベ作りが始まる。組合員は共同労働に出るのが義務づけられており欠席すると罰金を取られる。17日の祝いは5月29日の祝いと同様、友人の息子が除隊したためのもので、この席でAはサンポニャ(多列笛)を吹くことを頼まれる。サンポニャは、ボリビア高地特にラパス県で祭りの際などに好んで使われる楽器である。

第11週

	夫婦	夫	妻
6.18	収穫(オオムギ)+息子		

	運搬(カラスムギ)+息子	
6.19	選別(ジャガイモ)	
6.20	選別(ジャガイモ)	組合の会合
6.21		組合の共同労働 ?
6.22		衣裝修繕 組合の共同労働
6.23		衣装運搬(トムコ) ?
6.24		衣裝修繕(トムコ) ?

この週で今年のジャガイモの収穫がほぼ終わり、イモのサイズに基づいて、販売用(大)、食用(中)、チュニョ(凍結乾燥ジャガイモ)加工用(小)、ブタの餌用(虫食い)のものに選別する。

6月22日は夫が24日の祭りのために依頼された衣装の修繕で忙しかったため、代わりに妻が組合の仕事にでる。アンデスでは労働における男女差はないので、妻が夫の代理を勤めることができる。

翌23日午前9時半に衣装を持って家を出発。途中まで車で行き、ロバに積み変えて夜の11時によくペルー領トムコ村に到着。午前4時に修繕を始め、9時によく踊り手に渡すことができる。24日の記録では、「衣装の貸し代が安いこと」、「村人が祭りで皆酔っ払ってしまい、自分の食事の心配をしてくれなかった」ことに不満を述べている。

## 第12週

	夫婦	夫	妻
6.25		衣装貸し(キョウヨ)	チュニョ踏み
6.26		衣装管理(キョウヨ)	収穫(カラスムギ) チュニョ皮むき
6.27		衣装回収(キョウヨ)	収穫(オオムギ) チュニョ皮むき
6.28	踊りの練習		定期市(エスコマ)
6.29	収穫(カラスムギ)+子供 運搬(カラスムギ) チュニョ皮むき		
6.30		手伝(パドリノ)	糸紡ぎ
7.1	選挙(エスコマ)		

アンデス高地では、6月から8月にかけてが祭りの季節である。祭りの衣装製作、貸し付けを副業としているAはこの時期非常に多忙になる。いっぽう、チュニョ加工は夜間気温が零下になるこの時期をはずしては不可能になる [山本 1976]。そのため、この家族では夫が祭りの衣装の仕事、妻がチュニョ加工という分業態勢を取って

いる。

30日にはパドリノ（代父：結婚などの機会に結ばれる擬制親族）のところへ手伝いに行っているが、内容については不明。擬制親族関係を通じて、一種のパトロン・クライアント関係を作るのはアンデスで一般的。

7月1日は国政選挙。「(投票を終わって) 1日エスコマで過ごす。休んでいると友達が近付いてきたので、清涼飲料水を4本買う」というように、定期市のない日曜日をのんびりと過ごす。

第13・14週

夫婦	夫	妻
7. 2 ミサ(エスコマ) ヒツジ解体		
7. 3 もめ事仲裁	衣装修理	洗濯
7. 4	組合の共同労働	?
7. 5	衣装運搬(タナンパヤ)	家畜番
7. 6	衣装貸し(クタ・ゴノグレ)	家畜番
7. 7	衣装管理(クタ・ゴノグレ)	家畜番
7. 8	衣装管理(クタ・ゴノグレ)	家畜番
7. 9	衣装管理(クタ・ゴノグレ)	家畜番
7.10	衣装管理(クタ・ゴノグレ)	家畜番
7.11	衣装回収(クタ・ゴノグレ)	家畜番
7.12	衣装運搬(タナンパヤ)	家畜番
7.13	羊毛洗い	糸紡ぎ
7.14	手伝(パドリノ)	糸紡ぎ
7.15 定期市(エスコマ)		

7月に入って農作業も一段落。2日のミサは、半年前に亡くなった友人の息子のためのもの。3日には妻の実家で親子のもめごとがあったので、Aは「娘の夫としてこのもめごとの解決をしに」行く。

この2週間は、夫は祭りの衣装貸しで忙しい。8日にクタ・ゴノグレでサン・ペドロ・デ・オチョリアスの祭りが行われるので、13体のモレナダの衣装を運ばなければならない。1日目は途中のタナンパヤという村で泊まり、翌日ロバに乗せてクタ・ゴノグレへ。ここで6日間過ごす。14日の代父のところでの手伝いも衣装製作。この間妻は洗濯、家畜の世話。夫が帰宅してからは、翌週から始まる織物の準備として糸紡ぎを始める。

第15・16週

夫婦	夫	妻
7.16 祭り見物		

踊り		
7.17	貸金取立	帯織り
7.18	買物(P. アコスタ)	定期市(エスコマ)
7.19	糸紡ぎ	糸紡ぎ
		毛布織り
7.20	手伝(友人)	
		毛布織り
7.21	定期市(エスコマ)	?
7.22	手伝(友人)	毛布織り
7.23	衣装製作	毛布織り
7.24	共同組合	?
7.25	サッカー試合(エスコマ)	定期市(エスコマ)
		毛布織り
7.26	友人の手伝い	毛布織り
7.27	衣装貸し(タナンパヤ)	?
7.28	衣装回収(タナンパヤ)	?
7.29	衣装運搬	毛布織り

この週から、農閑期の重要な仕事のひとつである織物が開始される。ここで毛布と  
 っているものは、日本でいう毛布とは異なり、比較的太い毛糸を使って織られた寝  
 具。

16日のカルメンの祭りは、ユカの生徒ばかりでなく、隣のヨカリャタの生徒も行進  
 に参加し、また、ユカのいろいろな踊りが行われる。その後夫婦で踊りに参加する。  
 18日に夫が買物に行った P. アコスタ (プエルト・アコスタ) は、ペルー国境に近いカ  
 マチョ郡の郡庁所在地で、ポリビア、ペルー間の交易が盛んな所である。Aはこのあ  
 ともしばしば主にココアの買いつけにこの町へ出掛ける。この時期はまた、家の新・改  
 築の時期にあたり、Aは友人に頼まれてアドベ作りを手伝う。25日は組合の仕事に出  
 るべきであったが、妻はエスコマの定期市に出掛けてしまったため、父親に代理を頼  
 み、自分はエスコマへ、農民対学校の先生とのサッカーの試合に行く。

この週と翌週、表ではエスコマの定期市が水曜日と土曜日になっているが、本人の  
 記録には7月18日「今日木曜日は」となっているので、Aの記入違いによるものであ  
 る。

第17・18週

夫婦	夫	妻
7.30	診察(エスコマ)	?
7.31	?	?
8.1 脱穀(オオムギ)	来客	
8.2	祭り見物(ビヤ・プニ)	市(ビヤ・プニ)

8. 3	脱穀(ソラマメ) 運搬(ソラマメ)	来客	
8. 4	脱穀(エンドウマメ)		
8. 5		衣装貸し(チナヤ)	?
8. 6		祭り見物(チナヤ)	市(チナヤ, コカ売り)
8. 7	選別(ジャガイモ)		
8. 8	選別(ジャガイモ) 交換(ジャガイモ: サカナ)		
8. 9		衣装回収(チナヤ)	?
8.10	選別(オカ)	組合の会合	
8.11		定期市(チナヤ)	脱穀(キヌア)
8.12	定期市(エスコマ)		

8月に入りムギ、マメ類の脱穀が始まる。1日の来客はラパスに住む兄弟と、ユカにいる兄弟の家族が訪れたもので、「今日は大変うれしい日」と記しており、そろって食事をしている。2日は「インディオの日」。ビヤ・プニ村で近くの村から集まった生徒の行進がある。妻は人が集まるのを利用してコカの商いをする。6日も同様夫は祭りの見物、妻はコカの商い。後半はジャガイモの選別。6月の選別では小さいイモはチュニョ用であったが、チュニョ加工の時期が過ぎたため、ここでは小さいイモは種イモ用となる。

8日には、女の人（記述はないがおそらく近くの漁民）がサカナを持ってきて、ジャガイモとの交換を頼まれる。4アロバのジャガイモをサカナと交換したとあるだけで、サカナの種類、大きさ、数は記述なし。また同じ日にめずらしく商人がニワトリと卵を買いにくる。

第19週

	夫婦	夫	妻
8.13	脱穀(オオムギ)		
8.14	脱穀(オオムギ) 交換(アルパカの毛: オオムギ)	衣装修理	
8.15		衣装修理	定期市(パカウレス)
8.16		祭り見物(P. アコスタ) 買物	脱穀(オオムギ)+子供
8.17		買物(エスコマ) 手伝(友人)	脱穀(オオムギ)
8.18		衣装修理	定期市(チナヤ)
8.19	定期市(エスコマ)		

この週の主な仕事は6月末に収穫し、乾燥しておいたオオムギの脱穀。脱穀はウマやロバに踏ませる方法もあるが、ここでは広げたオオムギを棒でたたいて行う。14日

藤井 ポリビアの農民

にはペルーからきた人と、アルパカの毛4チリャ（チリャという単位が重さなのか量なのか不明）と脱穀したオオムギ3アロバ（50ペソ相当）との交換を行う。17日には午前中にエスコマでブタの飼料となるふすまを1キンタル（46kg）買い、背おって家まで運び、そのあとで友人の手伝いに行く。

第20週

夫婦	夫	妻
8.20	衣装運搬(ケリマ)	?
8.21	衣装修理(ケリマ)	家畜番
8.22	衣装管理(ケリマ)	家畜番
8.23	衣装管理(ケリマ)	家畜番
8.24	衣装管理(ケリマ)	?
8.25	洗濯	定期市(チナヤ)
8.26	定期市(エスコマ)	

この週は再び祭り（サン・バルトロメ）。20日に車でカルカンティアという所まで行き、そこでロバを借りてケリマへ。祭りの間食事と寝る場所は祭りの主催者から提供されるが、期間中ずっと、「踊り手がひどく酔っ払っているので、衣装を汚したり壊したりしないよう、自分が見張っていなければならない」。

第21週

夫婦	夫	妻
8.27	牧草集め	
8.28	手伝(友人)	風選(オオムギ)
8.29	風選(オオムギ)	定期市(パカウレス)
8.30	買物(P. アコスタ)	糸紡ぎ
8.31	手伝(友人)	?
9. 1	手伝(友人)	?
9. 2	定期市(エスコマ)	

風の強い日を選んで脱穀したオオムギの風選を行う。3日間行っている手伝いは、友人の家の梁や床に使うユーカリの製材。30日の買物は、ココとコウシ。このウシは2日のエスコマの市で売ろうとしたが、「安い値段でしか買手がいなかった」ので不成立。家畜の売買は夫の役割。

第22・23週

夫	妻
9. 3 衣装刺繍	糸紡ぎ
9. 4 衣装刺繍	?

前半は12日に渡す約束をした衣装の仕事に集中。8日に依頼者に渡しに行く。同日妻は、地

9. 5	衣装刺繻	?	名が記されていない場所で催されている、ナティビダの祭りへココカを売りに行く。夫は6日と9日に P. アコスタへココカを仕入れに行く。祭りが多いためかココカの売れ行きも良いのである。10~12日には泊まりがけで、ラパスで衣装製作をしている友人の所へ、刺繻の手伝いに行く。
9. 6	買物(P. アコスタ)	?	
9. 7	衣装刺繻	?	
9. 8	手伝(友人)	市(?, 祭り)	
9. 9	買物(P. アコスタ)	?	
9.10	手伝(友人)(ラパス)	?	
9.11	手伝(友人)(ラパス)	?	
9.12	手伝(友人)(ラパス)	?	
9.13	衣装運搬(トゥコンクニ)	?	
9.14	衣装管理(トゥコンクニ)	?	
9.15	衣装管理(トゥコンクニ)	?	
9.16	買物(P. アコスタ)	定期市(エスコマ)	

この間妻に関する記載がほとんど無いが、おそらく家畜番をしながら糸紡ぎをしているものと思われる。

第24・25週

夫婦	夫	妻
9.17	手伝(友人)	マンタ織り
9.18	マンタ織り	糸紡ぎ
9.19	マンタ織り	定期市(パカウレス)
9.20	買物(P. アコスタ)	マンタ織り
9.21	手伝(友人)	マンタ織り
9.22	手伝(友人)	マンタ織り
9.23	定期市(エスコマ)	
9.24	マンタ織り	糸紡ぎ
9.25	組合の共同労働	洗濯
9.26	糸紡ぎ	定期市(パカウレス)
9.27	買物(P. アコスタ)	?
	サッカー試合(エスコマ)	
9.28	手伝(友人)	糸紡ぎ
9.29	農具修繕(大工)	?
	ロープ作り	
9.30	定期市(エスコマ)	

9月も半ばを過ぎ、祭りも一段落。春の農繁期前の比較的暇な時期にあたる。夫は友人の家作りの手伝いに行くほか、織物も始める。マンタというのは女性用の肩掛けのことで、今織っているのは売るためではなく、妻が使うもの。この地方では、男も女も糸紡ぎや織物をする。この週も夫は P. アコスタへ2度ココカを仕入れに行く。29日には翌週から始まる耕起のために、大工に犁の刃の修繕を依頼する。

第26週

	夫婦	夫	妻
10. 1		組合の共同労働	?
10. 2		組合の共同労働	?
10. 3		組合の共同労働	?
10. 4		組合の共同労働	定期市(エスコマ)
10. 5	耕起(ジャガイモ)		
10. 6	耕起(ソラマメ)		
10. 7	定期市(エスコマ)		

前半の共同労働は、組合の建物のためのアドベ作り。この建物は組合の耕地から収穫したジャガイモを貯蔵するのにあてられる。後半になって、ジャガイモ畑とソラマメ畑の耕起から、いよいよ農作業が再開される。耕起はユンタと呼ばれる2頭のウシにひかせた犁耕で、ソラマメ畑の場合は「今年のソラマメの収穫が良いように」と、耕起を2度行う。5, 6の両日は昼食のための休み以外は1日中働き通し。なぜなら「今日(6日)は雨が降ったので、(播種が遅れないよう)急いで仕事をしなければならぬ」から。

第27週

	夫婦	妻
10. 8	播種(ソラマメ) 耕起(ジャガイモ)	
10. 9	播種(オオムギ)	
10.10	播種(オカ)	定期市(パカウレス)
10.11	播種(エンドウマメ) 播種(ソラマメ)	
10.12	播種(カラスムギ)	
10.13	播種(オオムギ)	
10.14	定期市(エスコマ)	

この週は播種が最盛期になる。ソラマメ(8, 11日), オオムギ(9, 13日), オカ(10日), エンドウマメ(11日), カラスムギ(12日)と次々と播種が行われる。播種は比較的軽い作業であるためか、子供たちの手伝いすら頼まず、夫婦だけで行う。こ

の忙しい中でも11日木曜日のエスコマの市へこそ行かなかったが、水曜日のパカウレスと日曜日のエスコマでのココ売りは欠かしていない。

第28週

	夫婦	夫	妻
10.15	耕起(ジャガイモ)		
10.16		組合の共同労働	?
10.17		組合の共同労働	?
10.18		耕起(ジャガイモ)	定期市(エスコマ)
10.19		組合の共同労働	?
10.20		組合の共同労働	マフラー編み
10.21	定期市(エスコマ)		

この週は、肥料の運搬、同分配、ジャガイモの播種、種イモの売却など、組合関係の仕事が多い。20日は「月が下弦の日 (cuarta mengueta) に播種をするのは良くない」という言伝えがあるため、播種を止め、組合の種イモの売却作業にあてる。

第29週

	夫婦	夫	妻
10. 22	耕起(ジャガイモ)		
10. 23	耕起(ジャガイモ)	バイエタ洗い	マフラー編み
10. 24		謝金受取(エスコマ)	マフラー編み
		スカート縫製	
10. 25	教会(エスコマ)	シャツ縫製	糸紡ぎ
10. 26		組合の会合	?
		手伝(父親)	
10. 27	終業式(エスコマ)	買物	
10. 28	定期市(エスコマ)	教会	

バイエタというのはヒツジの毛で織った粗布で、通常は地機ではなく高機で織られる。この布でズボンやスカートが作られる。23日以前にバイエタを織るという記録が無いので、他人から買った可能性もあるが、おそらく自家製。織りあげたバイエタはごみを落とすためと、布目を詰めるために1度洗わなければならない。24、25日に縫製しているスカートとシャツはおそらくこの時洗った布を使っている。

24日受け取る謝金とは、プロジェクトからの「記録」記入に対するもので、これまでも月に1度ママニが各協力者の家を訪ね、「記録」に目を通してから100ペソの謝金を渡している。

第30・31週

	夫婦	夫	妻
10. 29		?	スカート縫製
10. 30	播種(ジャガイモ)		
10. 31	肥料運搬		
11. 1	肥料運搬		
	播種(ジャガイモ)		
11. 2	墓参(万聖節)		
11. 3	踊りの練習		
11. 4	踊りの練習		
11. 5	二日酔、休息		
11. 6	播種(ジャガイモ)		
11. 7	播種(ジャガイモ)		
11. 8		手伝(父親)	貸金取立
		ヒツジの皮洗い	

11. 9	放牧	糸紡ぎ
11.10	ウシの値段調査(チナヤ)	洗濯
11.11	定期市(エスコマ)	

いよいよジャガイモの播種が始まる。ジャガイモ以外の作物にはほとんど肥料をやらないが、ジャガイモには家畜の糞のほかに、尿素とテミックという防虫のための農薬が心要である。

3, 4日の踊りの練習は、サンタ・カタリナの聖女の祭りが行われる、来年の4月30日のためである。この聖女はおそらく村の守護聖人である。「この2日播種が遅れた」といいながら夫婦で練習に参加するということは、守護聖人の祭りで上手に踊ることが、いかに重要かということを示している。練習をしながら酒を飲み過ぎたのか、翌日二日酔いで夫婦とも休息。10日にはチナヤ村へ、ウシの値段を調べに行っている。

第32・33週

	夫婦	夫	妻
11.12		組合の会合	?
11.13	播種(ジャガイモ)+子供		糸紡ぎ
11.14		ブタの世話	放牧地で家畜番+娘
11.15		ブタの世話	放牧地で家畜番+娘
11.16		ブタの世話	放牧地で家畜番+娘
11.17		ブタの世話	放牧地で家畜番+娘
11.18		ブタの世話	定期市(エスコマ) 放牧地で家畜番+子供
11.19		ブタの世話	放牧地で家畜番+娘
11.20		ブタの世話	放牧地で家畜番+娘
11.21		ブタの世話	放牧地で家畜番+娘
11.22	定期市(エスコマ)		
11.23		組合の会合 サッカーの練習	糸紡ぎ
11.24		ブタの世話	放牧地で家畜番+息子
11.25	定期市(エスコマ)		

13日のジャガイモの播種で今年の農作業もようやく一段落。この時期「家には飼料が少なくなったので」、ブタとロバを除く家畜をすべて家から2レグア(約11 km)離れた高地の放牧地(pajonal)へ移す。妻は1週間分の食料と毛布を持って放牧地に泊まりこむ。このシステムは、数家族が一緒になり、1週間ごとに各家族が当番で皆の家畜を預り、放牧地で管理するというもの。18日に妻は、子供たちに家畜を託して朝5時に放牧地を出、1度帰宅してからエスコマの市へコカを売りに行く。夫はこの間家においてブタとロバの世話をする。

18,25の両日はこのところ夫がP. アコスタヘコカを買いに行く時間がなかったため、エスコマの店で買い、市で小売する。

第34・35週

	夫婦	夫	妻
11. 26	?		
11. 27		サッカーの試合	?
11. 28		サッカーの試合	?
11. 29		二日酔(休息)	?
11. 30		スカート縫製	放牧地で家畜番
12. 1		ヒツジの皮洗い	洗濯
		組合の集会	
12. 2	定期市(エスコマ)	サッカーの試合見物 友人来宅	ココ売りの会合(エスコマ)
12. 3	放牧地で家畜番		
12. 4	放牧地で家畜番		
12. 5	放牧地で家畜番		
12. 6	放牧地で家畜番		定期市(エスコマ)
12. 7	放牧地で家畜番		
12. 8	放牧地で家畜番		
12. 9	放牧地で家畜番		定期市(エスコマ)

農閑期を利用してのレクリエーション、サッカー大会が始まる。アンデスの農民はサッカーが好きで、どの村に行っても必ずしも平らではないコートが作られている。また、村役の中にスポーツ係が置かれ、大会の世話をすることもある。この大会は1977年11月27日にユカのサッカー場が作られたのを記念して、その後毎年周辺の村対抗で行われるもの。両日は皆仕事を休んでこの一大イベントに集中する。試合が終わってビールやアルコールをしこたま飲んだため、翌日二日酔になる。前述のように、妻はエスコマの市でのココ売りの責任者である。ココばかりでなく、市ではパンや調味料、果物、アルコールなどのセクションごとに責任者が決められ、座る場所、客とのもめ事などの問題を解決している。

後半は夫婦で放牧地へ移住。ウシやロバも連れて行く。ここでは3家族の家畜(ウシ6頭、ヒツジ140頭)を管理する。その間にも妻の定期市でのココ売りは欠かさない。家には子供たちが残り、ブタとニワトリに餌をやる。

第36週

	夫婦	夫	妻
12. 10		サッカーの試合	?
12. 11		サッカーの試合(キラハタ)	糸紡ぎ

12.12	草取(ジャガイモ)	定期市(パカウレス)
12.13	家畜番	定期市(エスコマ)
12.14	来客(ママニ) 畑の測量 ジャガイモ売却	糸紡ぎ
12.15	祭り見物(コヤスヨ)	コカ売り(コヤスヨ)
12.16	サッカーの試合	定期市(エスコマ)

この週から地区対抗のサッカーの試合が始まる。初日は開会式。大会の後援はエスコマの有力者。皆「(良い) 賞品があるだろう」と期待している。翌日キラハタ村へ行き3試合する。ジャガイモの播種から1ヶ月たって草取が始まる。この作業は単に草を取るだけでなく、成長した苗が丈夫に育つよう、周りに土を寄せる仕事も含まれる。14日の測量はママニの要請で行ったもので、おそらくプロジェクトの資料にするためであろう。同日今月の謝金を受け取る。また、ママニに頼まれてジャガイモを売る。

第37週

	夫婦	夫	妻
12.17	草取(ジャガイモ)		
12.18		共同労働(草取) サッカーの試合	?
12.19		播種(オオムギ)+娘	定期市(パカウレス)
12.20		買物(P. アコスタ)	織物
12.21	播種(カラスムギ)		
12.22	(雨)	灌漑溝清掃	?
12.23	定期市(エスコマ) 新婚夫婦訪問		

18日の試合はキラハタ村との練習試合。ユカの選手が皆で10ペソずつ出し合って相手に清涼飲料水を提供する。この週の播種はオオムギとカラスムギ。通常の播種期よりずいぶん遅いが、おそらく食料ではなく家畜の飼料であり、熟す必要がないのでこの時期にまかれるのであろう。

22日は大雨のため、溝にたまった水がジャガイモを傷めないように清掃する。23日にはエスコマに住む義兄弟の息子がAのいとこと結婚したので、かれらの家を訪問。贈物として脱穀したオオムギを1カルガ持って行く。

第38・39週

	夫婦	夫	妻
12.24	草取(ジャガイモ)+息子		

新婚夫婦訪問			
12.25	(クリスマス)	サッカーの試合	試合見物+子供
12.26	播種(オオムギ)+子供	友人訪問(テムコ)	織物
12.27	草取(オカ)+娘		
12.28	共同労働(草取)	サッカーの試合	織物
12.29		放牧地で家畜番	織物
12.30	定期市(エスコマ)		
12.31		灌漑溝清掃	放牧地で家畜番
1980			
1. 1		サッカーの試合(エスコマ)	放牧地で家畜番
1. 2		放牧地で家畜番	定期市(パカウレス)
1. 3		放牧地で家畜番	定期市(エスコマ)
1. 4		草取(ソラマメ)+娘	放牧地で家畜番
1. 5		草取(ジャガイモ)+娘	放牧地で家畜番
1. 6	放牧地で家畜番		定期市(エスコマ)

農作業はジャガイモ畑、オカ畑、ソラマメ畑の草取が中心。妻は依頼された織物の仕事にかかる。灌漑溝清掃は、先週同様雨が多いため。12月31日からまた放牧地での家畜の世話の当番がまわってくる。

1月1日の新年を、妻は放牧地にいるが、子供と3人でニワトリ料理を作って祝う。この日は地区対抗サッカー試合の最終戦。3対1で勝つ。試合が終わって帰宅し、若い選手たちを混じえ、ビールと清涼飲料水を飲み、その後広場で踊る。かくして「今年の元旦は皆幸せで、なんの問題もなしで過ごすことができた」。

第40週

夫婦	夫	妻
1. 7	放牧地で家畜番	
1. 8	織物の整経	マンタ織り
1. 9	マンタ織り	定期市(パカウレス)
1.10	買物(P. アコスタ)	マンタ織り
	サッカーの試合	
1.11	手伝(父親)	
1.12	定期市(チナヤ)	?
1.13	散歩(エスコマ)	定期市(エスコマ)

妻は7日に当番が終わり、Aの姉妹と交替。彼女は自分が所有するヒツジの数が多いため2週間当番にあたる。8日にはマンタ織りのための整経(経糸の準備)をする。この作業は通常2人が組になって行われる。9日には妻はパカウレスの市から「徒歩で帰り、午後5時にとても疲れて帰宅する」。翌日今度は夫がP.アコスタまで、ペ

ルー製の毛糸を買いに徒歩で往復する。朝6時に出て午後4時帰宅。帰って一服してから村のサッカー場で試合。アンデスの農民は歩くのを苦しめないとよく言われるが、やはり徒歩で遠い所まで行くのは疲れるのであろう。

12日には夫がチナヤヘブタを買いに行く。13日には妻はいつものようにエスコマの定期市へココカ売りに、夫も「散歩をしに」エスコマへ行く。

第41・42週

	夫婦	夫	妻
1.14	草取(ジャガイモ)+手伝1人		
1.15		手伝(父親)	マンタ織り
1.16		マンタ織り	定期市(パカウレス)
1.17		買物, 売物(ラパス)	?
1.18		旅行	マンタ織り
1.19		組合の集会	?
1.20	定期市(エスコマ)	組合の集会	
1.21	5つの地区の会合		
1.22	牧草探し 友人訪問(祝い)	金を貸す	
1.23		楽師契約(トゥロ・クチョ) 親戚訪問(祝い)	?
1.24		サッカーの試合(エスコマ)	?
1.25		友人訪問(祝い)	?
1.26		組合の集会(エスコマ)	?
1.27	定期市(エスコマ)		

14日は2度目のジャガイモ畑の草取。ミンカ (minka) をひとりやとう。ミンカには報酬として「普通ジャガイモ、オオムギなど地元でとれる作物」を払う。この日は粒のオオムギを半アロバわたす。翌日父親の畑へミンカで出、同じように粒のオオムギを半アロバ受け取る。この地域では男女とも織物ができるので、妻が市に行っている間、夫が織物の仕事を手伝っている。

16日には夫がラパスへ「屠殺したヒツジを1頭持って行く。(売ったお金で) 買物をする」つもりであったが、「不幸にも安い値でしか売れなかった」。

22日には友人がAの自宅を訪れ借金を頼む。「妻とも相談して」月に2.5%の利息で5,000ペソ貸すことにする。後半の数日除隊祝いが続く。23日にはAのいとこの除隊の祝いのため、自分でトゥロ・クチョという村まで楽師の契約に行く。この日の支出は楽師6人、お祝いのビールその他で1,208ペソの消費。

第43週

	夫	妻
1.28	旅行(ラパス)	
1.29	会合(コチャバンバ)	?
1.30	会合(コチャバンバ)	?
1.31	会合(コチャバンバ)	?
2. 1	会合(コチャバンバ)	?
2. 2	買物(コチャバンバ)	?
	買物(ラパス)	?
2. 3	旅行	?
	買物(エスコマ)	?

1月30～2月1日まで、プロジェクトに協力している農民を集めて、コチャバンバで講習会が開催される。講習会では、「記録」に関する講評、農業指導、それぞれの地域（高地、谷、低地）における農牧生活に関するアンケート、意見交換、農牧生活に関する映画会などが行われ、これらを通じて、「より良い農業をする」のが目的と

なっているが、同時にレクリエーションとして地区毎のサッカーの交流試合も行われる。

ここでも妻に関する記録が全く無いが、おそらく先週に引き続きマンタ織りをしていると思われる。

第44週

夫婦	夫	妻
2. 4	組合の集会	マンタ織り
2. 5	放牧地での家畜番	マンタ織り
2. 6	儀礼	定期市(パカウレス)
2. 7	来客(ママニ)	マンタ織り
2. 8	裁判	?
2. 9	儀礼(チランパヤ)	
2.10	定期市(エスコマ)	マンタ織り

今週も妻はマンタ織り。「今日(5日)妻はマンタを50cm織り進む」とあるように、家事をしながら1日で織れる量は少ない。6日は「カンデラリアの日にはヤティリ(呪術師)をよんで、今年はヒョウが多く降りませんように、播種を行った作物すべてが良く実るために雨が適当な時期に降りますように」と願う儀礼を徹夜で行う。翌日も村役の家で飲み続けたが、ママニが来たので自宅に引揚げる。今月から「記録」記入の謝礼が月125ペソに増える。9日の午前中には、「作物に害虫がたくさんついており、オオムギは黄色くなって枯れかけているので、これらすべての悪いことが神の加護で無くなるように」と、すべての村人がチランパヤという場所に集まり、お祈りをする。残念ながらこの儀礼の詳しい内容は書かれていない。

第45週

夫婦	夫	妻
2.11	牧草集め	ヒツジの毛洗い
		マンタ織り

2.12	ニワトリ小屋作り+子供		
2.13		ニワトリ小屋作り	定期市(パカウレス)
2.14	儀礼(チランパヤ)		
2.15		貸金取立	?
		スカート縫製	?
2.16			放牧地で家畜番
2.17	踊り見物		

1月半ばから2月末までのこの時期は、農作業は暇になるが、端境期のため、「家に家畜の飼料が少なくなったので、ウシに食べさせる草を探しに行かなければならないほか、ニワトリ小屋作りなどの雑用もすませておかなければならない」。14日は朝5時に家を出て、2回目のお祈り。キリストに罪の許しを乞い、作物が枯れかけているので、雨を願う。

17日はカーニバル。食事をしてから「髪を洗い、新しい服に着替えて」エスコマへ行く。子供たちは家畜の世話で家に残る。「祭りで友達に会い、ビールを2本買ってかれらにふるまい、帰りがけにさらに2本買って帰宅。妻は子供たちにパン、モモ、トゥナ(ウチワサボテンの実)を買う」。

第46週

	夫婦	妻	
2.18	パドリノ訪問+子供		18, 19日は祭りの続き。祝いの間、パドリノ(代父)、友人達を訪問し、その時の手土産のために、酒、タバコ、紙テープや切り紙(祭りや祝いに使うもの)などに、かなりお金を使う。21, 22の両日は4月30日に行われるサンタ・カタリナの祭りのために、主催者の
2.19	友人訪問		
2.20	牧草集め	洗濯	
2.21	モレナダの練習		
2.22	モレナダの練習		
2.23	ヒツジ解体		
	兄弟のパドリノ訪問		
2.24	義兄弟のパドリノ訪問(チャヤワル)		

家に集まってモレナダの踊りの練習。この日もビールを買って飲む。

第47週

	夫婦	夫	妻	子供のみ
2.25			洗濯	
2.26		組合の共同労働	?	
2.27	手伝(父親)			
2.28	手伝(父親)			
2.29	手伝(父親)	本を読む	?	収穫(オオムギ)
3.1	収穫(ジャガイモ)	本を読む		

3. 2	学校の保護者の集会 始業式(エスコマ)	定期市(エスコマ)
------	------------------------	-----------

3月に入って再び農作業が始まる。最初は父親のジャガイモの収穫の手伝い。29日は夫がめずらしく午前中農業に関する本を読む間、こちらめずらしく子供たちだけでオオムギの収穫を行っている。おそらく、家畜の飼料にするためであろう。

3月2日から新学期が始まる。始業式にはラパスから文部省の役人がくるので歓迎のアーチを作る。

第48週

夫婦	夫	妻
3. 3 収穫(ジャガイモ)		
3. 4 収穫(ジャガイモ)		
3. 5 収穫(ジャガイモ)		定期市(パカウレス)
3. 6 選別(ジャガイモ) 収穫(ジャガイモ)		
3. 7 収穫(ジャガイモ)	手伝(友人)	
3. 8 収穫(ジャガイモ)		
3. 9 定期市(エスコマ)		

「今日月曜日は、1日中リファナ (lijhuana) という農具でジャガイモの収穫を始める」と共に、再び農繁期になる。「ジャガイモの植物(茎や葉)の半分は収穫物が雨に濡れないよう覆うために使い、残りは家畜に食べさせるため、家に運ぶ」。また「収穫したジャガイモはコスタル(穀物袋)に入れロバに積んで家まで運ぶ。「家に運んだジャガイモは、近くの乾いた場所に草を敷き詰めた所に広げ、雨に濡れないよう、上から草やジャガイモの葉や茎で覆う。虫食いのジャガイモは家畜の飼料にするため、屋内の隅に積んでおく」。7日は友人の家の屋根ふきの手伝い。雨期であるこの時期に屋根をふくのはめずらしい。

第49・50週

夫婦	夫	妻
3. 10 糸紡ぎ		
3. 11 収穫(ジャガイモ)	小屋作り	
3. 12 収穫(ジャガイモ)		
3. 13 収穫(ジャガイモ)		
3. 14	組合の共同労働	?
3. 15 運搬(ジャガイモ)		
3. 16 定期市(エスコマ)		

3.17	組合の共同労働	
3.18	組合の共同労働	
3.19	収穫(ジャガイモ)	
3.20	会合	定期市(エスコマ)
3.21	収穫(ジャガイモ)	
3.22	選別(ジャガイモ)	
3.23	定期市(エスコマ)	

ジャガイモの収穫が続く。10日は「1日中雨が降ったり止んだりのため、外での仕事ができない」ので、夫婦で糸紡ぎに精を出す。

11日には「この3日間ジャガイモ(畑)を見張るために寝る小屋を作る」。「今年のジャガイモは(まだ)良く熟していない。しかし虫が食いはじめており(収穫せざるを得ないので)、畑で(そのまま置いて)良く熟すよう、同じ植物(ジャガイモ)の葉で雨に濡れないよう覆い、熟してから家に運ぶ」。

Aの家だけでなく、組合の畑でもジャガイモの収穫が始まる。収穫したジャガイモのうち、大と中は売却用、小は種イモ用に選別する。17日の共同労働は収穫ではなく、今年の10月にジャガイモを播種するための耕地の耕起。

#### 第51週

夫婦	夫	妻
3.24	収穫(オオムギ)	
3.25	収穫(ジャガイモ)	
3.26	洋服仕立て依頼(チャワヤ)	定期市(パカウレス)
3.27	収穫(ジャガイモ)	定期市(エスコマ)
3.28	旅行(ラパス)	
3.29	買物(ラパス)	
3.30	定期市(エスコマ)	

24日「午前中雨が降ったり止んだり農作業ができない。午後ようやく雨が止んだのでオオムギを数束刈り入れる」。25日も午前中雨のため、午後からジャガイモの収穫。

26日には「サンタ・カタリナの祭りで着る乗馬用の背広を作ってもらいたい」ので、チャワヤの仕立て屋へ行く。28日にはラパスへ「旅費を出すためジャガイモを1アロバ持って」行く。翌日ラパスで洋服地、スカート、セーター、靴、刺繍したマント、パスタ1袋、塩1塊、ベルトなど約5,000ペソの買物をする。Aがラパスで買物をするのは1月末のコチャバンバの講習会の帰り道を除けば、約1年前の祭りの衣装作りの材料を仕入れに行った時以来である。今回のこの大量の買物は、おそらく背広同様、

4月末のサンタ・カタリナの祭りに備えてのものであろう。

第52・53週

夫婦	夫	妻
3.31 収穫(ジャガイモ)		
4. 1 収穫(オオムギ)		
4. 2 収穫(エンドウマメ)		
4. 3 収穫(オオムギ)		
4. 4	競馬見物(エスコマ)	コカ売り(エスコマ)
4. 5	競馬見物(エスコマ)	コカ売り(エスコマ)
4. 6 祭り見物(エスコマ)		定期市(エスコマ)
4. 7 収穫(オオムギ)		
4. 8 収穫(ソラマメ)		

ジャガイモ、オオムギに続いてエンドウマメ（2日）、ソラマメ（8日）の収穫が始まる。オオムギは鎌を使って刈ってから、畑の1ヶ所に山積みにし、乾燥させる。エンドウマメとソラマメは道具を使わず手で摘みとる。

4、5日はイースターのため仕事をしないが、妻は祭りの人出を当てこんでエスコマへコカ売りに行く。夫はのんびりと競馬見物。6日には友達と会い、ビールを飲ませてくれたので自分もお返しをするうちに、すっかり酔っ払ってしまう。

#### 4. 農民Aの生活の分析

前節で「記録」を通して農民Aの1年の生活を概観したが、ここではこの資料に基づいて、農耕、牧畜、分業、共同労働、現金収入などについて、A家の生活の分析を行う。

##### 4-1. 農 牧 生 活

###### 4-1-1. 農耕サイクル

「記録」によれば、A家ではジャガイモ、オオムギ、オカ、カラスムギ、ソラマメ、エンドウマメ、キヌアを栽培しているが、3-1.であげたこの地方で一般的な作物のうち、オユコ、タルウィは耕作していない。

ユカ村に限らず熱帯・亜熱帯に位置するアンデス高地の気温は、月平均を見るといわれる夏に当たる雨期の方がやや高いといえるくらいで、年間を通じては大きな変化はない。夜間の温度が零下になるのは3,500 m以上の高地で、それも6月から8月にかけての間だけである[YAMAMOTO 1981:90]。灌漑水路があまり発達していない高





地では、農耕サイクルは雨の降る時期によって決定される。1年は10月～4月の雨期と5月～9月の乾期に分れ、ユカの農耕も当然このような天候・気候に条件づけられて行われている。その内容は、耕起、播種に始まり草取および土寄せ、収穫、選別、加工（ジャガイモの場合）に終わる。作物ごとの作業内容、日時は表1の通りである。アンデス高地に一般的な輪作、休閑がユカで行われているかどうかについては、「記録」からだけではわからない。

この表から、ユカ村では2, 7, 9月が農閑期, 1, 11月も比較的暇な時期, そして残りの月が農繁期であることがわかる。ただし, 7月が前月に収穫した穀物や豆類を乾燥するため必要な期間であるため, 作業がなかったことは理解できるとしても, 8月になってすぐに再び作業を開始していることには, 単なる作物の乾燥の度合という現実的な条件によるのではなく, 他のなんらかの理由がある可能性が高い。

また, 一連の農作業を播種にまつわるもの（表で黒くつぶれている記号）と, 収穫にまつわるもの（白抜きの記号）とに分けてその数を比較すると, 大体1:2の割合になる。つまり, アンデス高地での農作業は収穫の方に倍の手間がかかっているということになる。

#### 4-1-2. 農作業の労働時間と収穫量

「記録」からそれぞれの作物の播種量, 収穫量, 播種量と収穫量の差（つまり純収穫量）, および費やした労働日数（人×日）, 日数当たりの収量を計算すると, 表2のようになる。これを「記録」に述べられている市場での売価に換算してみよう。ただし残念なことに, 「記録」にはジャガイモとオオムギの売り渡し価格のみしか記されていないうえ, 表2の注にも記したように, オオムギの価格は穀粒の場合であるので,

表2 播種量と収穫量の比較

	播種量	収穫量	収穫量 ／ 播種量	収穫量 － 播種量	延べ作 業日数	作業日数 当たり収量
ジャガイモ	264.50kg	1,495.00kg+a	約5.7倍	1,230.50kg	108日	約11.40kg+a
オオムギ	63.25kg	1,311.00kg+a	?	1,247.25kg	48日	26.00kg+a
オカ	23.00kg	529.00kg	約23倍	506.00kg	24日	21.10kg
カラスムギ	23.00kg	322.00kg	?	299.00kg	12日	25.00kg
ソラマメ	11.50kg	92.00kg+a	約8倍	80.50kg	8日	10.00kg+a
エンドウマメ	11.50kg	80.50kg	約7倍	69.00kg	6日	11.50kg
キヌア	?	?	?	?	1日	
その他の労働					6日	

注) オオムギ, カラスムギの場合播種量は穀粒であるのに対し, 収穫量は茎付きであるため, 正確な純収量（収穫量－播種量）は計算できない。

換算の資料としては使うことができない。ジャガイモの場合1アロバ(11.5 kg)当たり60~80ペソなので、仮にその間をとって70ペソで売ったとして、Aの家ではこの1年間にジャガイモは約10,600ペソ分の純収穫があったことになる。これを1日当たりの収入に直すと、約100ペソにしかならない。農作業の手伝いに行ったりあるいは頼んだ際、ジャガイモの場合で通常1日2アロバの手間賃をもらったり与えたりする(3-3. 参照)。つまり、1日当たりの収入はその半分にしかならないということになる。

また、作業総日数は213日となる。娘は家畜の世話だけ、息子は学校に行っているこの家族の中で、実際農作業を行えるのは夫婦2人であることを考えると、農作業に当てられている時間は、夫婦2人の1年間の作業可能日数(365×2)の約3割にしかすぎないことがわかる。

#### 4-1-3. 手伝い

夫婦で手伝いに行ったのは5回で、いずれもAの父親の農作業である。妻だけが手伝いに行ったのはわずかに1回でこれも父親の農作業。季節は2月~5月の収穫期に集中している。注目されるのは、父親とはいえ必ずなにか収穫物を謝礼として受け取っていることである。

夫だけが手伝いに行ったのは、父親(5回)、代父(2回)、友人あるいは隣人(18回)と多くなる。仕事の内容は農作業もあるが、代父の所およびラパスの友人の所へ衣装製作の手伝いに行ったのを除くと、材木切り、アドベ作りなど家の建築関係がほとんどを占める。前述のように、父親の手伝いに行った場合、必ず謝礼を受け取っているにもかかわらず、代父と友人の場合、謝礼を受け取っているのは1回のみで、残りの19回には謝礼もしくはそれに相当するような事柄については、何の記録もない。

いっぽう手伝いを頼んだ方を見ると、組合の作業に父親に代わりに出してもらったのを除くと、この1年間にわずか3回で、いずれも農作業(耕起2回、草取1回)である。これらの場合もしかるべき作物を謝礼として出している。記録の1年に限ってみると、Aの場合は明らかに手伝いに行く方が多く、出入の均衡が取れていない。また、親子の間での手伝いは、いわゆる相互扶助あるいは労働交換ではなく、子の方からの一方的な奉仕の行為であるという友枝のペルー領アヤクチャの事例[1968:9]は、ここでは当てはまらない。

親以外への手伝いの内容は、衣装製作と家の建築である。前者に関連して、時にはA自身非常に忙しい時期があるにもかかわらず、手伝いを頼んだことはない。後者は当人が家を建築しなければ、手伝いを頼むことは当然ありえない。アンデス高地の農

民がどの程度の頻度で家の建築を行うかというデータはないが、おそらく一生に数度という程度であろう。この地域の家は通常アドベ作りであり、その製造にはかなりの人手を要する。まして日干しレンガであるアドベ作りは乾期に行うのが最善であり、かつある程度まとまった期間に済ませてしまう方が都合が良い。また、使う量は多くないとはいえ、屋根や梁、窓枠などに使う木材の加工も、家族労働の範囲では難しい。そのため、家の建築は村人が多数集まって協力して行われる。その場合の報酬は食事や飲物の供与くらいで、謝礼は払われないのが普通である。

アンデスの高地の農村では、アイネ (ayne) またはワヘ・ワヘ (waje waje)、ミンカなどとよばれる、相互扶助が発達しているといわれており、一般に前二者は無償、後者は有償とされている [MAYER 1974]。この定義によれば、Aの場合、父親の手伝いはミンカであり、その他、特に家の建築の手伝いは、アイネに相当するということになる。しかしアイネが全くの無償労働あるいは単なる奉仕であるという訳ではなく、その場では報酬は受け取らないが、いずれ自分が施主になる時に労働で返してもらうことが期待されている。このように考えると、確かにアンデス高地では相互扶助が発達しているといえる。しかし村人にとっての家の建築というのは、大勢の人が集まってひとつの仕事をし、食事を共にするという一種のお祭り、あるいはレクリエーションの場であるという意識の方が強いというのが実情である。

前述のように、Aがこの1年間に手伝いを頼まれたのは計32回。それに対して頼んだのは4回である。この数字をもって、この地域で相互扶助が発達しているかどうかの判断はできない。また残念ながら、この回数がアンデスの他の地域に比べて多いのか少ないのか、あるいは出入りがあるはなはだしく不均衡であるか否かについては、これまでの報告には量的なデータが示された例がないので判断はつきかねる。いずれにしても、相互扶助の社会関係の範囲は、親族、代父などの擬制親族、そして数人の友人という非常に狭いものであるということは、これらのデータからいえるであろう。

さらに、労働と社会関係については、次のようなことが指摘できる。すなわち、手伝いの日数のうちから何らかの報酬を受け取った日を除いた日数（短期的にみれば、いわば利他的活動といえるもの）は年間19日となる。この利他的活動は、Aの家族がこの村での生活を円滑に行きたくための、社会的潤滑油といえるだろう。A家の場合この活動はほとんどA自身が行っているため、かれの年間総労働日数291日（1年365日から、4-3-3. であげた祭り見物、サッカーの試合などの非労働日を引いたもの）で、利他的活動日数19を割ると、その割合は約6.9%となる。いいかえれば、Aは自分の1年間の総労働時間の約7%を利他的活動にさくことにより、いわば将来に備え

て労働力をプールしているともいえる。

#### 4-1-4. 牧畜

3-2. で述べたように、A家ではウシ、ロバ、ブタ、ヒツジ、ニワトリなどの家畜・家禽を飼育している。その他、3-2. に「クイを飼っている台所」とあるのでクイも飼育していると思われる。クイはアンデス高地では食用として、あるいは儀礼用として非常に一般的な動物である。しかしどういう訳か、その後の記述にはクイを食べたとか、クイの餌を探しに行ったとかいう記述は全くない。また、アンデス中・南部高地に多いリャマ、アルパカに関する記述もない。

このうちウシとロバはそれぞれ耕起のためのユンタ（犁耕）用および運搬用に飼育されているので、数は少ない。いっぽうヒツジとブタの飼育頭数は比較的多い。しかし、自家消費用として屠殺するのはただ1度、ラパスへ買物に行く時の費用の足しとして1度という記録があるだけで、ブタの場合はむしろ売り買いをする回数の方が多い。アンデス北・中部高地では、よくウシは農民の貯金であるという言葉聞く。つまり、祭り、病気、その他のために、まとまった量の現金が必要になると、ウシを売ってそれを調達するわけである。Aの場合はヒツジが貯金になっていることが推測できる。ラパスへ買物に行く時、ジャガイモなどの作物だけでなく、ヒツジを屠殺して持って行っている。

農業と異なり、牧畜には多忙期と閑散期の区別がない。基本的には、ウシ、ロバは舎飼いであるが、ヒツジとブタは年間を通じて村内の草地・休閑地で放牧する。ただし年に1度11月から1月にかけて、パホナルと呼ばれる場所（記録にはないが、おそらく村はずれの農耕に適さない村共有の草地）で約2ヶ月放牧する。この場合3家族が共同して、1週間交替で順番に管理するというシステムをとっている。

### 4-2. 仕事の分担

#### 4-2-1. 農作業

前節の記録の部分を見ると、農作業は1年のうち110日行われていることがわかる。そのうち86日、つまり全体の約80%は夫婦そろって同じ仕事をしている。残りの24日は、夫のみ（7日）、妻のみ（10日）、夫と娘（3日）、妻と子供（1日）、妻と娘（1日）、夫と妻が別々の作業（1日）、そして子供だけ（1日）となっている。夫婦で農作業をする日をさらに詳しくみると、その中で子供あるいは他人が手伝っているのはわずか10日で、残りの76日（全体の70%）は夫婦のみで仕事をこなしていることがわかる。この中で子供たちのみの作業は家畜に与えるオオムギの刈り入れで、仕事としてはま

さに子供にまかせることができる程度のものにすぎない。

これらのことから、アンデスにおける農作業というのは「夫婦」をひとつの単位として営まれているということがわかる。インカ時代は、夫婦と未婚の子供からなる家族が生産と消費の単位であった [ファーブル 1977:40]。もしそうであるならば、ヨーロッパ世界との接触後500年近くたち、新しい作物、家畜や道具の導入があったにもかかわらず、アンデスの農業形態は、今日においても基本的にはほとんど変わっていないということを示しているともいえる。

#### 4-2-2. 牧畜

3-2. で述べたように、Aが飼育している20頭のヒツジと2頭のブタの管理は、11才の娘の仕事となっている。学校が休みの間あるいは娘に特別の事情があって放牧の仕事ができない時は、息子あるいは家族の誰かが代わるか、あるいは他人に依頼することもあるが、彼女はたとえ祭りであろうと、原則としてこの仕事を休むわけにはいかない。

ヒツジとブタ以外の家畜（ウシとロバ）は、夫か妻のどちらかが世話をする。家にいる時は夫か妻のどちらかが給餌をし、川に水を飲ませに連れて行く。時には農作業のかたわら、畑の側に杭で繋いでおくこともある。

#### 4-2-3. 副業

前述のように、Aの家では夫が祭りの衣装の製作、妻がココの小売りをして家計を助けている。ココ売りは、近くのエスコマとパカウレスの定期市で行われる（エスコマで31回、パカウレスで16回）ほか、8月にチナヤへ2度行っている。また、祭りその他の行事の人出を利用して別の村に行くこともある（8回）というように、1年間で56回も行われている。ココの小売り値は、量り売りだと1ポンドで20ペソ、ひとつかみだと2ペソであると記されている。この売り値は、P. アコスタあるいはエスコマでの仕入れの値段（1ポンド35～45ペソ）と比較すると、売り値が買い値の半分ということになってしまい、説明がつかない。おそらく、ココ売りのほとんどは、量り売りではなく、手づかみによる少量売りであり、その際は当然かなりのマージンを取っているであろう。

夫の祭りの衣装関係の仕事は、製作、修繕、運搬、管理を含めて年間45日費やされている（ラパスでの友人の手伝い3日は除く）。主として6～8月の農閑期を利用して行われているため、農作業には影響を与えない。しかし、時にはペルー領の村へも2日ばかりで出掛け、祭りに付き物の酔っ払いが衣装を汚したり破損しないよう監視も

表3 夫婦・夫・妻の別による買物の種類と回数

品物	夫婦	夫	妻	品物	夫婦	夫	妻
支出一般	3			飼料			1
食料			5	ロープ		1	
食料・調味料			1	衣食住関係			
主食				灯油		2	
パン	19			鍋		1	
パスタ	17			洗剤	14		
トウモロコシ(硬)			5	石鹼			1
コメ			3	バケツ	2		
調味料				衣類・履物			
サトウ	9			染料			1
シオ(塊)	2			糸玉		2	
シオ			1	帽子	4		
食用油	5			シャツ	4		
トウガラシ	10			セーター	3		
オレガノ			6	運動靴	2		
コショウ			1	靴下	2		
コミノ			1	靴			2
野菜				上っ張り		1	
タマネギ			9	刺繡マント		1	
パセリ			7	スカート		1	
カボチャ			6	ズボン		1	
ニンジン		1		タオル		1	
その他の食料				ハンカチ		1	
イワシ缶詰	8			布地		1	
サカナ			2	ベルト		1	
ウミンタ			1	電池	3		
サラダ			1	雑貨			
トウモロコシ(軟)			1	マトラカ		2	
果物			24	ボール紙		1	
果物				櫛		1	
バナナ	3			歯ブラシ		1	
イチゴ			3	薬		1	
モモ			3	薄紙			1
トゥナ			1	文房具			
嗜好品				本		2	
アメ		1		ボールペン		2	
ココ	28			ノート		2	
タバコ		2		消しゴム		2	
ビール	14			鉛筆		1	
清涼飲料水	6			紙		1	
アルコール			2	定規		1	
農牧関係				糊		1	
鋤の刃		1		その他			1
ウシ		3					
ブタ		2					
家畜飼料	10						

しなければならず、また、不足する材料は自分で購入しなければならないなど、決して楽な仕事ではない。その割に1体につき200ペソという貸し料は安いと嘆いている。

#### 4-2-4. 買物

定期市以外での買物の場所としては、首都のラパス、エスコマの南のチャワヤ、北のP. アコスタそして地元のユカがある。その他に1月末から2月初めにかけての講習会の時にコチャパンバでも買物をしているが、これは特例である。これらの買物は、地元のユカであっても必ず夫が行く。Aの家族がこの1年間に購入した品物のリストは表3の通りであるが、これを見ると当然のことながら毎日消費する食料品が圧倒的に多く、そこにはほとんどの場合妻が関与している。パンとパスタを夫が購入することが多いが、パンは必ずしも家族のためではなく、買物へ町へ出た時、あるいは旅行中などに自分が食べたものも含まれているためである。パスタは重いせいもあるが、ラパスやP. アコスタでまとめ買いをするためでもある。この表から、妻は定期市を利用して食料、果物などの嗜好品、調味料などの購入にかかわり、その他の品物は基本的には夫が購入するということが読み取れる。つまり、臨時的なもの、まとまった支出を伴う買物は夫がしているといえよう。

前述のように、A家は年間79回定期市へ行っているが、そのうち夫婦で行った回数は29回。妻だけが48回。夫だけは2回にすぎない。夫だけのケースは、チナヤという村で行われた家畜市である。家畜の売買はエスコマでも行っているが、この場合も必ず夫が行く。また、エスコマだけを取り上げると、全部で61回のうち約半数の28回夫婦で出掛けている。そのうちの何回かは、夫は「散歩をする」ためとしても、他に用事がない限り、定期市には夫婦で行くというのが基本なのであろう。このデータは、筆者が以前報告した定期市の調査【藤井 1987】における観察を裏付けるものでもある。

#### 4-2-5. 夫婦の分業

A家の夫と妻が仕事の分担をしているのは、いわば専門職ともいえる前述のふたつの副業（祭りの衣装製作、市でのココ小売り）を除けば、ほとんどない。アンデス高地で重要な織物を見ると、ユカでは、毛洗い、糸紡ぎ、整経、織りなどのさまざまな作業において、男女による仕事の分担はない。確かに食事の支度だけは妻の分担となっているが、洗濯は夫が行くこともある。また、「私(A)はいつも妻の手伝いをする」とあるように、家事一般に関して男女（夫婦）間の作業が明確には区別されていない。この「記録」から判断すると、「アンデス農民社会では仕事、権利義務、役割に関し

て男女間の違いがおどろくほど少ない」[友枝 1986: 225]という指摘は、まず妥当なものであろう。

### 4-3. そ の 他

#### 4-3-1. 収支

3-2. の表には記していないが、この「記録」には、コカはもちろんジャガイモその他の農作物や家畜を売った場合、その売上げや価格が、また、買物をした場合それぞれの品物の値段が書かれている。そこで1979年4月9日から1980年4月8日までの、すべての収入と支出を計算してみると、収入の合計18,220ペソに対し、支出の合計は44,528ペソになり、収支は26,306ペソの赤字となる。ただし中には、売上げあるいは買った値段が書かれていない場合もある。特に重要なコカに関して売上げが記録されていない日が18日もあるので、1回の売上げの平均を収入に加え、その他無記入のものに関しては、買物で無記入のものと相殺したとしても、わずかに3,800ペソ収入が増えるだけで、赤字は相変わらず22,508ペソにものぼる。A家の現金収入はこれ以外に、衣装の貸し代が $15,270 + \alpha$  (数字がきちんと記録されていないものを  $\alpha$  とする)、毎月のプロジェクトからの謝金が100ペソ (ただし2月から125ペソ) 計1,250ペソあるのみで、多く見積っても、総収入は20,000ペソを越えることはないと思われ、結局は赤字である。

1年間の収支が赤字になることは実際問題としてありえないので、赤字になった理由としては、収入を全部記録していないのではないかとということがまず考えられる。確かに、支出の方はほぼ完全に記録しているのに、収入の記録は漏れが多い。支出の記入漏れはわずかに10回のみに対し、収入の方は23回 (ほとんどがコカの売上げ) ある。買物の回数の方が圧倒的に多いので、未記入の割合は収入の場合の方がはるかに多くなる。そこで、この「記録」が公開を前提として書かれたものであるため、収入を隠したのではないかとということが考えられる。しかし、「記録」全体として特に不利益なことを隠すという態度はみられないこと、ママニによる指導も適宜行われていたことを考えると、記入漏れが意図的であった可能性は少ないであろう。ただし、この「記録」を記入したのは夫であり、漏れているもののほとんどが妻のコカ売りの場合であるということは、単に夫が妻に対して売上げを聞き忘れたか、聞きにくかったためであるとも考えられる。もうひとつの可能性は、Aは家で小規模な店を開いていることが、「(買った) ビールは自宅で売るため」という記述からわかる。「記録」には、店での売上げに関しては全く記述がないが、ビールだけでなく、おそらく市や祭りで

売れ残ったココも売られ、その売上げが赤字を補填しているのであろう。

前述のように、食料品以外の買物は夫が主に分担しているが、このことは、この家の家計を夫が握っているということは意味しない。なぜなら、借金を頼まれた時「妻に相談して」から承諾しているからである。

#### 4-3-2. 農業協同組合

3-1. に示したように、ユカには組合員60人からなる農業協同組合が組織されている。この数がそのまま家族数であるとしたら、3-1. で述べた村の家族数64のほとんど全体が加盟していることになる。ここでは、組合員がなんらかの事情で組合の作業に参加できない場合は、必ず代わりの人を出さないと罰金を取るという制度をとっている。Aも4月から3月にかけて毎月1~9回、年間合計39回にわたり、ジャガイモの共同耕作、貯蔵庫の建築などの活動、あるいは役員を選出その他にかかわるさまざまな会合に時間を費やしている。しかしその結果として、収穫したジャガイモの分配、あるいは肥料や農薬の入手、あるいは新しい品種の導入など、かなりの利益を得ている。したがって、組合の作業というものは、結局は自分のための生産労働であり、いわゆる共同体に対する義務づけられた労役奉仕とは区別される。ちなみに、ユカ村では灌漑溝の清掃、教会の畑の耕作、道普請など、村人が共同で行う活動はほとんど行われていない。「記録」をみる限りでは、2月に行われた「村人全員が参加する」儀礼のみが、それに相当するであろう。

#### 4-3-3. 社交・娯楽

社交・娯楽としては、祭りの見物(13回)、結婚式あるいは除隊の祝いなどの家族的な祝い(10回)、踊りの練習(6回)、サッカーの試合・練習・見物(15回)、来客あるいは訪問(10回)、旅行(6回)、儀礼(4回)、その他(墓参、裁判、もめ事仲裁、始・終業式、教会のミサ、農業関係の本を読むことなど)(計10回)が記録されている。

当然のことながら、夫のみが行うサッカー、旅行を除いて、社交・娯楽・儀礼に関しては、常に夫婦そろって参加するのが原則で、祭見物に夫だけが行く場合があるのは、妻は大体その時ココの小売りをしているためである。

このように見て行くと、夫婦が単位になって行動しているのは、学校関係の始・終業式を除けば、結婚式、葬式、墓参なども含めた、いわゆる伝統的な行事であるということがわかる。いっぽう来客はラパス在住の兄弟一家が来た例以外は、大部分が近くの友人あるいはママニなどのプロジェクトの関係者である。4-1-3. で触れた手伝い

の範囲が、親族、擬制親族、そして近くの友人の範囲にとどまっていることと合わせて考えると、農民の社会関係の狭さが読み取れよう。

## 5. お わ り に

以上、ボリビアの1農民Aの1年間の「記録」をもとにして、中央アンデス南部高地の農民の生活のいくつかの側面について分析を行った。その結果、A家の労働に関して次のことが指摘できた。

a) 農作業：1年間の農作業日数は、夫婦の年間可能労働日数の約3割にしかすぎない。

b) 男女の分業：性差による作業・役割分担は、農業労働に限らず、日常活動のほとんどの局面で明確でない。

c) 相互扶助：個人が扶助を期待できる社会関係の範囲は狭い。また、扶助の出入りは不均衡であるが、出はいずれ返ってくるという暗黙の了解があるので、年間31回という数字は、アンデス農村において相互扶助が発達している証拠ともいえる。

d) 利他的労働と社会関係：Aは自分の労働時間の約7%を利他的活動にあてているが、この数字は将来に備えて、労働力をプールしている割合といえる。

ただし、これらの結論はボリビア高地という中央アンデスの一地域の、ひとりの農民の「記録」を資料としたものであり、ただちに全中央アンデスに一般化できるわけではない。しかし、以上の分析により、数量的データを含んだこの「記録」の有効性は確認できたといってよいであろう。

## 謝 辞

本報告は、文部省科学研究費補助金による海外学術調査（現地調査）「中央アンデス農牧民社会の民族学的研究」（研究代表者：友枝啓泰，課題番号：59043072）の報告の一部である。本報告に対し貴重な資料を提供していただいたマウリシオ・ママニ氏、また、執筆にあたり、貴重な指示をいただいた研究代表者の友枝氏に、感謝の意を表する。

## 文 献

ファーヴル，アンリ

1977 『インカ文明』小池佑二訳 東京：白水社。

藤井龍彦

1987 「中央アンデスの定期市——ボリビア領ラパス県高地部の事例——」『国立民族学博物館研究報告』12(1): 49-128。

藤井 ポリビアの農民

HATCH, John

1982 *Nuestros Conocimientos, Vol I: Región altiplano*. La Paz: MACA, AID, RDS.

MAYER, Enrique

1974 Las Reglas del juego en la reciprocidad andina. In G. Alberti & Enrique Mayer (Compiladores), *Reciprocidad e intercambio en los Andes peruanos*, Lima: Instituto de Estudios Peruanos, pp. 37-65.

友枝啓泰

1968 「中央ペルーのインディオ農村における結婚——アヤクチョ県の事例——」『民族学研究』33(1): 1-16。

1986 『雄牛とコンドル』東京：岩波書店。

山本紀夫

1976 「中央アンデスの凍結乾燥イモ，チューニョ——加工法，材料およびその意義について——」『季刊人類学』7(2): 169-216。

YAMAMOTO, Norio

1981 Investigación Preliminar sobre las Actividades Agro-pastoriles en el Distrito de Marcapata, Departamento del Cuzco, Perú. In S. Masuda (ed.), *Estudios Etnográficos del Perú Meridional*, Tokio: Universidad de Tokio, pp. 85-137.